

# 養護性と親子関係 I

井 森 澄 江\* 大 井 京 子\*\*

## Awareness of Nurturance Analyzed from the Viewpoint of Parent-Child Relationships (Study I)

Sumie IMORI\* Kyoko OOI\*\*

### 要約

本研究では、青年期の養護性－養育性意識（‘守る’といった養育者としての自分の意識）と介護性意識（‘守る’といった介護者としての自分の意識）－がそれまでの親子関係すなわち愛着や親の養育態度・行動とどのように関連しているのかを検討した。調査対象は 378 名の女子大学生である。調査の質問紙は赤ちゃんや子どもに対する関心や世話、老いてくる親に対する世話についてのほか、就学前の母子関係、中高生時の親への愛着 (IPA)、親の養育態度・行動の認知 (PBI) および現在の愛着 (IWM) についてなど 182 問からなる。

養育性と親子関係については、就学前の母子関係の安定、現在の愛着の安定と子どもを守りたいという養育養護性の関連が示唆された。また、青年期前期の親の養育態度・行動を情愛に満ちていたと認知していることと子ども・親を守りたいという養護性とは関連していることが示された。介護性と親子関係については、就学前の母子関係の安定、青年期前期の親への愛着の安定（信頼、コミュニケーション）、現在の愛着の安定と介護性の親を守りたいといった感情との関連が示唆された。

キーワード：養護性、親子関係、質問紙調査

### 問題と目的

養護性 (nurturance) とは、‘相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能’ (Fogel, A.D., Melson, G.F. & Mistry, J. 1986) と定義される。発達途上にある対象に、栄養・支援・励ましなどを与えることを通して、その発達を促進させる (すなわち nurture) といった行動・構えの底に慈しみ育む心と技能があるとして立てられた概念であり、対象として、代表的には、子どもが考えられているが、障害を持つ人や老人、さらには一時的にその有能性を失っている状態にある人々や動植物も含められる (小嶋, 1995)。つまり養護性はエリクソンが成人期の発達課題としている生

殖性 (徳；世話) と対応しており、成人に求められる資質ではあるが、発達初期から徐々に形成発達していくと考えられる。

近年、子どもの養育養護、親の介護養護など、この‘養護性’に関連してさまざまな問題が顕在化しつつあり、それにともない養護性がどのように形成されるかを明らかにしようとする研究が、特に養育養護性の形成の観点から行われるようになった (実際に妊娠したり出産してからの意識の変化に関して (中西・栗津・小嶋, 1992、栗津・中西・小嶋 1993 等)、青年期の親準備性に関して (井上・深谷, 1986、伊藤, 2003 等)、幼児・児童の養護性の発達について (小嶋・河合, 1988 等))。井上ら (1986) は、親準備性の形成に影響を与える要因として、両親から愛されたという記憶で占められている子ども時代、心理的安定感のある家庭

\* 東京家政大学文学部心理教育学科 発達心理研究室

\*\* 東京家政大学文学部心理教育学科資料室

で育った経験などをあげている。小嶋(1991)は、親になる前の女子青年における養護性の構成成分の中心として、赤ちゃんや子どもへの関心、子どもをうまく扱える自信、積極的な養育的役割の受容をあげ、それと本人の社交性、母親像、父親像、これまでの対人的接触の経験との関係を報告している。岩治(2005)は、男子青年の養育養護性は現在の内的ワーキングモデルと関係が深いこと、女子青年の養育養護性は就学前期の母子関係と関係が深いことを報告している。このように、これまでの研究からは、養育養護性意識については対人関係、親子関係との関連が示唆されている。George & Solomon(1996、1999)は、養育養護性の発達にとって青年期の重要性を指摘するとともに、養育(caregiving)と愛着(attachment)の関連について、次のような理論を提出している。「養育行動は愛着と独立にそれ自身組織された、しかし、発達的にまた行動的にリンクした行動システムとして組織化されている。そして養育行動を導き出す養育表象の構築はそのスピードや敏感期は異なるものの愛着表象の構築と対応して進行していく。養育表象の構築にとっての最初の敏感期は青年期である。青年期には養育表象システムを自分の中に構築するプロセスの一部として、‘守る’といった養育者としての自分の表象を、‘守られる’といった愛着する子どもの表象に対応させつつ、作り上げていくことになる。青年期の養育者としての自己構築のための2つの基本的問いかけは‘子どもを守ることができるか’‘子どもを守りたいか’である。」すなわち、George & Solomonの理論によれば、養育者との愛着関係が青年期の養育養護性を作り上げることになる。ただ、愛着表象は比較的安定しているとはいえ、16歳くらいまでは可塑性をもつと考えられる。どの時点でのどういった関係が青年期の養護性形成と関連するの

だろうか。本研究では、青年後期の養育性意識(‘守る’といった養育者としての自分の意識)が幼児期以降これまでの親子関係すなわち愛着や親の養育態度・行動とどのように関連しているのかを検討していく。また、養育養護性のみでなく、同じく‘守る’といった介護養護性とはどのように関係しているのかについても検討を行う。これまでの研究では、養護性に関して、養育的側面のみがとりあげられていたが、本研究では、養育養護性と介護養護性の2側面から「養護性と親子関係」を検討していく。まず、養育養護性、介護養護性という2つの養護性がどのように関連しているのかを探った上で、各養護性と就学前の母子関係、中高生時の親への愛着、親の養育態度・行動の認知および現在の愛着との関係を検討していく。

## 方法

1. 調査対象；東京近県女子大学家政学部および文学部に所属する女子大学生 378 名（平均年齢 20.0 歳 範囲 18 歳～22 歳）
2. 実施時期；2004 年 7 月中旬
3. 調査方法；夏休み前の授業の最後に家政学部および文学部に所属する女子大学生に質問紙を配布、協力を依頼した。質問紙は大学構内で記入または自宅に持ち帰り記入してもらい、配布当日から夏休み明け一週間の間に回収ボックスを用いて回収した。
4. 質問紙調査内容；質問紙は無記名方式であり、育った地域環境、年齢、家族構成、子どもの頃の母親の就労形態、自分の理想の働き方・生き方などを含むフェイスシート 11 項目をはじめ「青年期の親への愛着 (IPA 尺度) (28 項目)」、「親の養育態度の認知 (PBI 尺度) (25 項目)」、「青年期女子の養護性に関する尺度 (43 項目)」、「現在の愛着 (IWM 尺度) (18 項目) と就学前

の母子関係尺度 (9 項目)」、「両親の関係 (13 項目)」、「娘性 (10 項目)」、「自分と親、親と祖父母との関係 (13 項目)」、「老いてくるだろう親の世話についての気持ちや態度 (12 問)」の 182 問からなる。本報告の分析で用いるのは、以下の養護性および愛着、親子関係に関する項目である。

(1) 養護性に関する項目；子どもの養育養護者としての準備性を査定する項目と親の介護養護に対する気持ちや態度を査定する項目を用いた。

1) 子どもの養育養護性に関する項目；岩治 (2004 未発表) の青年期女子の養護性に関する尺度 43 項目を用いた。この尺度項目は、中西・栗津 (1997) の養護性尺度 61 項目のうちの 51 項目、小野寺 (2003) の可能自己尺度の 6 項目、伊藤 (2003) の子ども・子育てに関する意識尺度の 3 項目、伊藤 (2003) の同性の親への同一視・性受容尺度 3 項目からなる計 63 項目に対する、155 名の女子大学生の 4 段階評定の回答について、因子分析 (主因子法プロマックス回転) を行った結果、得られたものである (井森、岩治、清水、大井 2004 参照)。「子ども赤ちゃんへの関心」尺度 11 項目、「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度 10 項目、「親に対するポジティブな感情」尺度 9 項目、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度 5 項目、「愛護のこころ」尺度 4 項目、「奉仕的な志向」尺度 4 項目の計 43 項目からなる。目的で述べたように、青年期の養育者としての自己構築のための 2 つの基本的問いかけは「子どもを守ることができるか」「子どもを守りたいか」だとされる。今回用いる尺度の「子ども赤ちゃんへの関心」尺度 11 項目と「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度 10 項目は「子どもを守りたいか」に、「将来の子育てに対するネガテ

ィブ予測」尺度 5 項目は逆の意味で「子どもを守ることができるか」に対応するものと考えられる。全 43 項目に対して今回の調査では「非常によく当てはまる」(6 点) から「全くあてはまらない」(1 点) までの 6 段階のうち 1 つを選んでもらう 6 段階評定を用いた。

2) 親の介護養護性に関する項目；親を守りたいといった感情に関する 3 項目、自力的介護の態度 (親を守れるという気持ち) に関する 5 項目、自力的介護の拒否の態度に関する 2 項目、他力的介護に関する 2 項目の計 12 項目からなる。

これらの項目は岡林・杉澤・高梨・中谷・柴田 (1999) が在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造を検討する際に使用した項目を参考にしながら青年期の養育者としての自己構築のための 2 つの基本的問いかけ「子どもを守ることができるか」「子どもを守りたいか」に対応させて検討し作成した項目である。

(2) 愛着、親子関係に関する項目；幼児期の母子関係と現在の愛着及び青年期前期の親への愛着と親の養育態度・行動の認知を査定する項目を用いた。

1) 幼児期の母子関係に関する項目；就学前の母子関係に関する項目 (酒井 (2001)) 16 項目のうち就学前の安定的な母子関係、就学前の拒否的な母子関係、就学前のアンビバレントな母子関係各 3 項目計 9 項目を用い、「非常によく当てはまる」(6 点) から「全くあてはまらない」(1 点) までの 6 段階のうち 1 つを選んでもらう 6 段階評定を用いた。

2) 青年期前期の親への愛着 (IPA 尺度)；Inventory of Parent and Peer Attachment (Armsden, G.C. & Greenberg, M.T. 1987) Section 1 の青年期の両親への愛着を査定する 28 項目を中高生ころを思い出して回答してもらう回想型に修正、「非

常によく当てはまる」(6点)から「全くあてはまらない」(1点)までの6段階のうち1つを選んでもらう6段階評定を用いた。

3) 親の養育態度、行動の認知(PBI尺度); Parental Bonding Instrument (Parker, G., Tupling, H., Brown, L.B. 1979) 子どものころの親の態度について回想して答えてもらう質問紙 25 項目について、中高生ころを思い出して回答してもらう回想型に修正し、もともとの 4 段階評定ではなく「非常によく当てはまる」(6点)から「全くあてはまらない」(1点)までの6段階評定を用いて実施した。

4) 現在の愛着に関する項目(IWM尺度); 内的作業モデル尺度(託摩・戸田 1988)を用いた。成人の愛着を査定する全 18 項目(安定尺度 6 項目、アンビバレント尺度 6 項目、回避尺度 6 項目)を「非常によく当てはまる」(6点)から「全くあてはまらない」(1点)までの6段階のうち1つを選んでもらう6段階評定を用いた。

## 結果と考察

### 1. 青年期後期女子の、子どもに対する養育養護性と親に対する介護養護性との関係

青年期後期女子の子どもに対する養育養護性と親に対する介護養護性の関係を検討するため、親の介護養護に関する 12 項目それぞれに「あてはまる」(6段階評定の 4, 5, 6)と回答した群と「あてはまらない」(6段階評定の 1, 2, 3)と回答した群に分けた。そして、両群の、子どもに対する養育養護性を測る尺度の 6 つの下位尺度の平均点の差の検定(T検定)を行った。なお、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度は逆の意味で「子どもを守ることができるか」に対応するものと考えられ、反養育養護性尺度である。

### (1) 親を守りたいといった感情に関する 3 項目

①「私は、親に頼られるのがうれしいと感じる」に関しては、養育養護性の「子ども赤ちゃんへの関心」尺度「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度「親に対するポジティブな感情」尺度および「奉仕的な志向」尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった(「世話、養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」 $p < .001$ , 「子ども赤ちゃんへの関心」 $p < .005$ , 「奉仕的な志向」 $p < .05$ )。②「私は、親のためならなんでもしたい(なんでもできる)」は「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度以外の 5 尺度「子ども赤ちゃんへの関心」尺度「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度「親に対するポジティブな感情」尺度「愛護のこころ」尺度「奉仕的な志向」尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった(「親に対するポジティブな感情」 $p < .001$ , 「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」 $p < .005$ , 「愛護のこころ」「奉仕的な志向」 $p < .05$ )。

③「自分のことより親のことを考えてしまう」は「親に対するポジティブな感情」尺度「愛護のこころ」尺度「奉仕的な志向」尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった(「愛護のこころ」「奉仕的な志向」 $p < .005$ , 「親に対するポジティブな感情」 $p < .05$ )。また有意差は認められないが、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。

養育養護性の「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」といったほとんどの下位

尺度で、親を守りたいといった感情 (①②) を持つ群が、そうでない群よりその平均得点が高いことから、養育養護性と介護養護性の「守りたい」ということでの共通性、関連性が示唆される。また、そのベースに親に対するポジティブな感情があることが考えられる。ただ、自分に優先して親を思う (③) となると、「親に対するポジティブな感情」「愛護のこころ」「奉仕的な志向」の3尺度で両群の平均得点に差がみられることから親に対するポジティブな感情に加えて他者を思う強い養護志向との関連があることが考えられる。

## (2) 自力的介護の態度 (親を守れるという気持ち) に関する5項目

④「親の面倒は私が見なくてはならないと責任を感じる」については「奉仕的な志向」尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった (「奉仕的な志向」 $p<.005$ )。⑤「私は、親が老いて病弱になったら、親の世話をしてあげたい」は「子ども赤ちゃんへの関心」尺度「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度「親に対するポジティブな感情」尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった (「親に対するポジティブな感情」 $p<.001$ 、  
「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」 $p<.005$ )。また有意差は認められないが、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。⑥「私にとって、親の世話は生きがいである」は「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度以外の5尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった (「世話、養育に対するポジティブな感情」「親

に対するポジティブな感情」「奉仕的な志向」 $p<.001$ 、「子ども赤ちゃんへの関心」 $p<.005$ 、  
「愛護のこころ」 $p<.01$ )。⑦「私は、親に苦労をかけたので、親の老後は楽をさせてあげたいと思う」は「親に対するポジティブな感情」尺度と「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった (「親に対するポジティブな感情」 $p<.001$ 、「将来の子育てに対するネガティブ予測」 $p<.05$ )。⑧「私は、実際に親の面倒をみることになったとき、素直に受け入れることができる」は「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度以外の5尺度「子ども赤ちゃんへの関心」尺度「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度「親に対するポジティブな感情」尺度「愛護のこころ」尺度「奉仕的な志向」尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった (「親に対するポジティブな感情」 $p<.001$ 、  
「世話、養育に対するポジティブな感情」「愛護のこころ」「奉仕的な志向」 $p<.005$ 、「子ども赤ちゃんへの関心」 $p<.05$ )。また有意差は認められないが、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。

養育養護性のほとんどすべての下位尺度で、親の世話をするという自力的介護の態度—親を守れるという気持ち (⑤⑥⑧) を持つ群が、そうでない群よりその平均得点が高いことから、養育養護性と介護養護性の「守れる」ということでの共通性、関連性が示唆される。ただ、責任を感じる (④) となると、「奉仕的な志向」尺度のみで両群の平均得点に差がみられることから他者を思う強い養護志向性との関連が考えられる。また⑦「私は、親に苦労をかけたので、

親の老後は楽をさせてあげたいと思う」に関しては、親に苦勞をかけた（親が自分の子育てでうまくいかず苦しんでいた）を強調して捉えた群と親の老後は楽をさせてあげたいと思うという部分に反応した群がいたため、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度と「親に対するポジティブな感情」尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点となったと考えられる。この項目に対して検討が必要と思われる。

### (3) 自力的介護の拒否の態度に関する2項目

⑨「親を大切にしたい気持ちと、実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある」は「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度のみで「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった ( $p < .001$ )。それ以外の5尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった（「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」「愛護のころ」「奉仕的な志向」 $p < .001$ ）。⑩「自分自身、老いてくると、親の面倒をみるのは、体力的にも経済的にもつらいと思う」は「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度「親に対するポジティブな感情」尺度「愛護のころ」尺度「奉仕的な志向」尺度で「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった（「親に対するポジティブな感情」 $p < .001$ 、「世話、養育に対するポジティブな感情」「愛護のころ」「奉仕的な志向」 $p < .05$ ）。また、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度では「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった ( $p < .001$ )。

養育養護性のほとんどすべての下位尺度で、

自力的介護の拒否の態度（⑨⑩）を持つ群が、そうでない群よりその平均得点が低く、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度で自力的介護の拒否の態度（⑨⑩）を持つ群が、そうでない群よりその平均得点が高いことから、養育養護性（守りたい、守れる）と自力的介護の拒否の態度との逆の関連が示唆される。

### (4) 他力的介護に関する2項目

⑪「精神的に親の支えになりたいが、病弱な親の世話は病院や施設にまかせたい」は「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度以外の5尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている（「世話、養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」 $p < .01$ 、「子ども赤ちゃんへの関心」「愛護のころ」「奉仕的な志向」 $p < .05$ ）。また有意差は認められないが、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度は「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より高くなっている。⑫「親の世話に関しては、介護サービスを利用したほうがよいと思う」は「子ども赤ちゃんへの関心」尺度「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度「親に対するポジティブな感情」尺度「愛護のころ」尺度の5尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった（「親に対するポジティブな感情」 $p < .001$ 、「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」 $p < .005$ 、「愛護のころ」 $p < .05$ ）。

養育養護性のほとんどすべての下位尺度で、他力的介護の態度（⑪⑫）を持つ群が、そうでない群よりその平均得点が低いことから、養育養護性（守りたい）と他力的介護の態度との逆の関連が示唆される。

2. 養育養護性と親子関係

(1) 養育養護性と就学前の母子関係・現在の愛着

就学前の母子関係 3 尺度、現在の愛着・内的作業モデル尺度 3 尺度と養護性 6 尺度との相関を表 1 に示した。

就学前安定は「親に対するポジティブな感情」と高い正相関があるだけでなく、「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」「愛護のこころ」とも正相関がみられる。就学前回避は「親に対するポジティブな感情」と高い負相関があり、「将来の子育てに対するネガティブ予測」と正相関を示している。

IWM 安定は「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」「奉仕的な志向」と正相関がある。逆に、IWM 回避は「子ども赤ちゃんへの関心」「世話、養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」「奉仕的な志向」と負相関、「将来の子育てに対するネガティブ予測」と正相関を示している。IWM アンビバレントも「将来の子育てに対するネガティブ予測」と正相関があり、「親に対するポジティブな感情」と負相関を示している。

就学前でも現在でも「安定」は養育養護性のほとんどの下位尺度と正の相関が、「回避」は負の相関がみられる。「アンビバレント」については、就学前「アンビバレント」は低いながらも「親に対するポジティブな感情」と正相関が見

られるが、現在の「アンビバレント」は「親に対するポジティブな感情」と負相関を示すとともに、「世話、養育に対するポジティブな感情」とも低い負相関がみられ、かつ「将来の子育てに対するネガティブ予測」と正相関を示している。就学前および青年期後期の「回避」、青年期後期の「アンビバレント」は養育養護性を阻害すると考えられる。

(2) 養育養護性と青年期前期の親への愛着と親の養育態度・行動に対する認知

青年期前期の親への愛着 IPA 28 項目を本報告と同様の質問に対する 697 名の 20 歳以降の女性の回答を因子分析した結果、3 因子「信頼（両親は私の判断を信用してくれた、私の両親は私の気持ちを大事にしてくれていた等 6 項目）」、「コミュニケーション（私は両親に自分の悩み事や問題を話していた、私に何か悩み事があると両親はすぐ察しがついたようだ等 6 項目）」、「疎外（両親が察しているより私のイライラは激しいものだった、誰を頼ればよいのかわからない時期があった等 6 項目）」合計 18 項目が得られた。また、親の養育態度、行動に対する認知 PBI 25 項目についても本報告と同様の質問に対する 734 名の 20 歳以降の女性の回答を因子分析した結果、3 因子「情愛（いつも暖かく親しみある声で話しかけてくれた、私に絶えず微笑みかけてくれた等 9 項目）」「依存期待（私のことを父母がいなければ自分のことも処理でき

表 1；就学前の母子関係 3 尺度、現在の愛着・内的作業モデル尺度 3 尺度と養護性 6 尺度との相関

	就学前安定	就学前アンビバレント	就学前回避	IWM 安定	IWM アンビバレント	IWM 回避
子どもへの関心	.299**	.042	-.156**	.295**	-.026	-.365**
世話ポジティブ	.288**	-.035	-.160**	.394**	-.153**	-.347**
親ポジティブ	.692**	.126**	-.539**	.364**	-.220**	-.296**
子育てネガティブ	.002	.047	.237**	-.072	.367**	.172**
愛護のこころ	.237**	.044	-.140**	.148**	.013	-.163**
奉仕的な志向	.130*	.075	-.063	.208**	-.080	-.212**

\* 相関係数は 5%水準で有意 \*\*相関係数は 1%水準で有意

ないと思っていた、私をつとめて父母に依存させようとしていた等 7 項目)」「決定尊重 (私の望みのままに自由にさせてくれた、私が望めばいつも外出させてくれた等 6 項目)」の 3 因子合計 22 項目が得られた (井上、大井、西村、井森 2005)。そこで、本分析では IPA については原版の 28 項目ではなくこの 18 項目、PBI については原版の 25 項目ではなくこの 22 項目を用いる。

青年期前期の親への愛着 IPA 18 項目 3 尺度、親の養育態度・行動に対する認知 PBI 22 項目 3 尺度と養護性 6 尺度との相関を表 2 に示した。

IPA 信頼、IPA コミュニケーションは「親に対するポジティブな感情」と高い正相関がある。一方、IPA 疎外には「親に対するポジティブな感情」と高い負相関があり、「将来の子育てに対するネガティブ予測」と正相関を示している。

PBI 情愛は「親に対するポジティブな感情」と高い正相関があるだけでなく、「子ども赤ちゃんへの関心」とも正相関がある。また PBI 決定尊重は「親に対するポジティブな感情」と正相関している。一方、PBI 依存期待には「親に対するポジティブな感情」と負相関がみられる。

青年期前期の親の養育態度・行動を情愛に満ちていたと認知していることと青年期後期の養育養護性 (守りたい) とは関連していると考えられる。一方、青年期前期の親への愛着関係における疎外感情は青年期後期の養育養護性 (守

ることができる) を阻害すると考えられる。

### 3. 介護養護性と親子関係

青年期女子の親に対する介護養護性と親子関係の関連を検討するため、親の介護に関する 12 項目それぞれに「あてはまる」(6 段階評定の 4, 5, 6) と回答した群と「あてはまらない (6 段階評定の 1, 2, 3)」と回答した群に分けた。そして、各群の、親子関係尺度のうちの就学前の母子関係 3 尺度、現在の愛着・内的作業モデル IWM 尺度 3 尺度の平均点 (範囲は 1~6 点) を比較し、表 3 に示した。また、各群の、親子関係尺度のうち青年期前期の親への愛着 IPA 3 尺度、親の養育態度・行動に対する認知 PBI 3 尺度の平均点 (範囲は 1~6 点) を比較し、表 4 に示した。

(1) 介護養護性と就学前の母子関係・現在の愛着 IWM (表 3 参照)

1) 親を守りたいといった感情に関する 3 項目

①「私は、親に頼られるのがうれしいと感じる」に関しては、就学前安定、アンビバレントおよび IWM 安定尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。また、逆に、就学前回避、IWM 回避尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。②「私は、親のためならなんでもしたい (なんでもできる)」は就学前安定、IWM 安定尺度で「あてはま

表 2 ; 青年期前期の親への愛着 IPA18 項目 3 尺度、親の養育態度・行動に対する認知 PBI22 項目 3 尺度と養護性 6 尺度との相関

	IPA 信頼	IPA コミュニケーション	IPA 疎外	PBI 情愛	PBI 依存期待	PBI 決定尊重
子どもへの関心	.164**	.168**	-.107*	.232**	-.035	-.018
世話ポジティブ	.148**	.138**	-.129*	.192**	-.022	-.029
親ポジティブ	.716**	.605**	-.507**	.772**	-.344**	.336**
子育てネガティブ	-.077	.027	.259**	-.089	.115*	-.034
愛護のこころ	.099	.156**	-.033	.174**	-.025	.075
奉仕的な志向	.097	.114*	-.085	.127*	.017	.016

\*相関係数は 5%水準で有意 \*\*相関係数は 1%水準で有意



る」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。また、逆に、就学前回避、IWM 回避尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。

③「自分のことより親のことを考えてしまう」は就学前安定尺度のみで「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。

就学前、青年期後期（現在）とも安定は介護性（親を守りたいといった感情）との関連が示唆される。就学前安定は自分に優先して親を思う（③）という強い志向性と関係していることが考えられる。

## 2) 自力的介護の態度（親を守れるという気持ち）に関する 5 項目

④「親の面倒は私が見なくては行けないと責任を感じる」については就学前安定尺度のみで「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。⑤「私は、親が老いて病弱になったら、親の世話をしあげたい」については就学前安定尺度のみで「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、就学前回避、IWM 回避尺度で、「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。⑥「私にとって、親の世話は生きがいである」は就学前安定、IWM 安定尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、就学前回避尺度で、「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。⑦「私は、親に苦勞をかけたので、親の老後は樂をさせてあげたいと思う」は就学前安定、就学前アンビバレント尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。

⑧「私は、実際に親の面倒をみることになったとき、素直に受け入れることができる」は就学前安定、IWM 安定尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、就学前回避尺度で、「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。

安定とくに就学前安定と介護性（自力的介護の態度）との関連が示唆される。逆に、回避とくに就学前回避は介護性（自力的介護の態度）を阻害することが示唆される。

## 3) 自力的介護の拒否の態度に関する 2 項目

⑨「親を大切にしたい気持ちと、実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある」は就学前回避、IWM アンビバレント、IWM 回避尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、就学前安定、IWM 安定尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。⑩「自分自身、老いてくると、親の面倒をみるのは、体力的にも経済的にもつらいと思う」は就学前回避、IWM 回避尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。

就学前、青年期後期（現在）とも回避は自力的介護の拒否の態度と関連が示唆される。

## 4) 他力的介護に関する 2 項目

⑪「精神的に親の支えになりたいが、病弱な親の世話は病院や施設にまかせたい」は就学前安定尺度のみで「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。一方、就学前回避、IWM 安定、IWM 回避尺度では「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。⑫「親の世話に関しては、介護サービスを利用したほうがよい

と思う」は就学前安定尺度で「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。逆に、就学前回避、IWM 回避尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。

就学前、青年期後期（現在）とも回避は他力的介護の態度と関連が示唆される。逆に、就学前安定は他力的介護の態度否定との関連が示唆される。

(2) 介護養護性と青年期前期の親の養育態度、行動に対する認知 PBI と親への愛着 IPA（表 4 参照）

1) 親を守りたいといった感情に関する 3 項目

①「私は、親に頼られるのがうれしいと感じる」に関しては、PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。また、逆に、PBI 依存期待、IPA 疎外尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。②「私は、親のためならなんでもしたい（なんでもできる）」は PBI 情愛、PBI 決定尊重、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。また、逆に IPA 疎外尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。③「自分のことより親のことを考えてしまう」は IPA コミュニケーション尺度のみで「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。

青年期前期の親の養育態度・行動を情愛に満ちていた、自己決定を尊重してくれたと認知していることと青年期後期の介護養護性（守りたい）とは関連していると考えられる。青年期前期の親への愛着関係における信頼、良好なコミ

ュニケーションは親を守りたいといった感情と関連があることが示唆される。逆に、青年期前期の親への愛着関係における疎外感情や親の養育態度・行動を依存することを期待していたと認知していることは青年後期の親を守りたいといった感情を阻害することが考えられる。また青年期前期の親への愛着関係における疎外感情は青年期後期の守ることができるという感情も阻害すると考えられる。

2) 自力的介護の態度（親を守れるという気持ち）に関する 5 項目

④「親の面倒は私が見なくてはいけないと責任を感じる」については PBI 情愛尺度のみで「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。⑤「私は、親が老いて病弱になったら、親の世話をしてあげたい」については PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、IPA 疎外尺度で、「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。⑥「私にとって、親の世話は生きがいである」は PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。⑦「私は、親に苦勞をかけたので、親の老後は楽をさせてあげたいと思う」は PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度で、「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、IPA 疎外尺度で、「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。⑧「私は、実際に親の面倒をみるようになったとき、素直に受け入れることができる」は PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺

度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、PBI 依存期待、IPA 疎外尺度は「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より高くなっている。

青年期前期の親の養育態度・行動を情愛に満ちていた、自己決定を尊重してくれたと認知していること、青年期前期の親への愛着関係における信頼、良好なコミュニケーションは自力的介護の態度（親を守れるという気持ち）と関連があることが示唆される。

### 3) 自力的介護の拒否の態度に関する 2 項目

⑨「親を大切にしたい気持ちと、実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある」は IPA 疎外尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。

⑩「自分自身、老いてくると、親の面倒をみるのは、体力的にも経済的にもつらいと思う」は IPA 疎外尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、PBI 情愛、IPA 信頼尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。

青年期前期の親への愛着関係における疎外感情は自力的介護の拒否の態度と関連があることが示唆される。

### 4) 他力的介護に関する 2 項目

⑪「精神的に親の支えになりたいが、病弱な親の世話は病院や施設にまかせたい」は IPA 疎外尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション

ン尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。⑫

「親の世話に関しては、介護サービスを利用したほうがよいと思う」は IPA 疎外尺度で「あてはまる」群の平均点が「あてはまらない」群より有意に高い得点であった。逆に、PBI 情愛、IPA 信頼、IPA コミュニケーション尺度では「あてはまらない」群の平均点が「あてはまる」群より有意に高い得点であった。

青年期前期の親への愛着関係における疎外感情は他力的介護と関連があることが示唆される。

## まとめ

1. 青年期後期女子の子どもに対する養育養護性と親に対する介護養護性について「守りたい」「守ることができる」ということでの共通性、関連性が示唆された。すなわち、親を守りたいといった感情を持つ群、自力的介護の態度（親を守ることができる）を持つ群は、養育養護性尺度得点が、そうでない群より有意に高い。また、自力的介護の拒否の態度を持つ群、他力的介護の態度を持つ群は反養育養護性尺度得点が、そうでない群より有意に高かった。
2. 青年期後期女子の養育養護性と愛着関係については、就学前の母子関係、現在の IWM とともに安定と「守りたい」という養育養護性の関連が示唆された。また、青年期前期の親の養育態度・行動の認知 PBI の情愛も「守りたい」という養育養護性の関連が示唆された。逆に、就学前の母子関係の回避、現在の IWM のアンビバレントは「守ることができる」という養育養護性を、青年期前期愛着 IPA の疎外、現在の IWM の回避は「守りたい」という養育養護性を阻害すると考えられた。
3. 青年期後期女子の親に対する介護養護性と愛

着関係については、就学前の母子関係、青年期前期の親への愛着 IPA、現在の IWM とも安定(信頼、コミュニケーション)は介護性の親を守りたいといった感情との関連が示唆された。安定とくに就学前、青年期前期の安定(信頼、コミュニケーション)は自力的介護の態度との関連も示唆された。逆に、就学前の回避、青年期前期 IPA の疎外、現在の IWM の回避は、自力的介護の拒否の態度、他力的介護の態度と関連が示唆された。青年期前期の親の養育態度、行動に対する認知 PBI の情愛、決定尊重、は介護性の親を守りたいといった感情、自力的介護の態度(親を守れるという気持ち)と関連があることが示唆され、逆に、青年期前期の親の養育態度、行動に対する認知 PBI の依存期待は親を守りたいといった感情を阻害することが考えられた。

## 文献

- Armsden, G.C. & Greenberg, M.T. 1987 The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
- 栗津幹子・中西由里・小嶋秀夫 1993 育児期の女性の心理に関する縦断的研究 (3) —妊娠中の「養護性」や「対人関係」と出産後の社会的支援体制に関する意識との関連から—日本発達心理学会第 4 回大会発表論文集、307
- Fogel, A.D. & Melson, G.F. マルカンピン美鈴 (訳) 1989 子どもの養護性の発達 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣 170-186
- Fogel, A.D., Melson, G.F. & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the Determinants of Nurture: A Reassessment of Sex Differences. In A.D. Fogel & G.F. Melson (Eds.), *Origins of Nurture*, LEA 53-67
- George, C., & Solomon, J. 1996 Representation models of relationships: Links between caregiving and attachment. *Infant Mental Health Journal*, 17, 198-217
- George, C., & Solomon, J. 1999 Attachment and Caregiving. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment*. Guilford 649-670
- 井森澄江・岩治まとか・清水宏子・大井京子 2004 青年期女子の養護性の発達 (1) 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集、376
- 井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江 2005 親子関係の生涯発達心理学的研究 (2) 日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集、212
- 井上義朗・深谷和子 1986 親になること：現代青年の子ども意識・親意識 小林登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮澤康人編「新しい子ども学 第 2 巻 育てる」71-94 海鳴社
- 伊藤葉子 2003 中・高校生の親準備性の発達 日本家政学会誌 第 54 巻 第 10 号 801-802
- 岩治まとか 2005 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文
- 小嶋秀夫 1991 親となる過程の理解 我妻堯・前原澄子編「母性の心理社会学」医学書院 94-109
- 小嶋秀夫 1995 発達心理学辞典 (岡本夏木ら監修) ミネルヴァ書房
- 小嶋秀夫・河合優年 1988 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究、昭和 62 年度科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書
- 中西由里・栗津幹子・小嶋秀夫 1992 育児期の女性の心理に関する縦断的研究—妊娠中の「養護性」と「対人関係」に関する意識の分析を中心に—日本発達心理学会第 3 回大会発表論

文集、119

中西由里・栗津幹子 1997 「養護性に関する研究—  
研究 (2) —妊婦と未婚学生の比較—」  
山女子  
学園大学研究論集第 28 号 (社会科学篇) 81  
—89

岡林秀樹・杉澤秀博・高梨薫・中谷陽明・柴田博  
1999 在宅障害高齢者の主介護者における対  
処方略の構造と燃えつきへの効果 心理学研  
究, 69, 486-493

小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念  
の変化 発達心理学研究 第 14 巻 第 2 号

180—190

Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. 1979 A parental  
bonding instrument. British Journal of Medical  
Psychology, 52, 1-10

酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子  
関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性  
格心理学研究, 9, 59-70

詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年  
の対人態度；成人愛着スタイル尺度作成の試  
み, 東京都立大学人文学報, 196, 1-16

表3；女子大生の介護養護性の違いによる2群の就学前の母子関係尺度、青年期後期の愛着（IWM）尺度の平均値と標準偏差およびT検定結果 &gt;:p&lt;.05 &gt;&gt;:p&lt;.001

①

	就学前					
	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.9 >>	4.3	3.1 >	2.8	2.3	<< 2.8
SD	.87	.99	1.00	.88	1.0	1.2

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.7 >>	3.2	3.6	3.8	2.8	<< 3.2
SD	.91	.92	.79	.91	.76	.98

N あてはまる=262  
あてはまらない=96

②

	就学前					
	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.9 >>	4.4	3.0	2.9	2.3	<< 2.7
SD	.68	.93	1.03	.89	1.06	1.15

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.7 >>	3.4	3.6	3.6	2.9	<< 3.1
SD	.95	.88	.83	.82	.77	.91

あてはまる=212  
あてはまらない=145

③

	就学前					
	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.9 >>	4.6	2.9	3.0	2.3	2.5
SD	.98	.90	.90	1.01	1.14	1.09

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.7	3.6	3.7	3.6	2.9	3.0
SD	.95	.92	.90	.80	.82	.84

あてはまる=103  
あてはまらない=255

④

	就学前					
	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.8 >	4.6	3.0	2.9	2.4	2.5
SD	.92	.94	.95	1.02	1.10	1.13

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.6	3.6	3.7	3.6	2.9	3.0
SD	.95	.90	.83	.82	.88	.76

あてはまる=231  
あてはまらない=127

⑤

	就学前					
	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.8 >>	4.1	3.0	2.7	2.4	<< 3.1
SD	.88	1.12	.97	1.00	1.06	1.3

IWM							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均		3.6	3.5	3.6	3.8	2.9	<< 3.5
SD		.91	1.13	.80	1.00	.80	.94
						N あてはまる=319 あてはまらない=37	
⑥ 就学前							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	>>	5.0	4.6	3.0	3.0	2.2	< 2.5
SD		.75	.95	.85	1.01	1.06	1.12
IWM							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	>>	3.9	3.5	3.6	3.6	2.8	3.0
SD		.94	.92	.85	.82	.89	.82
						N あてはまる=82 あてはまらない=275	
⑦ 就学前							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	>>	4.8	4.3	3.0	> 2.6	2.4	2.6
SD		.92	.95	.95	1.10	1.11	1.18
IWM							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均		3.6	3.4	3.6	3.7	2.9	3.2
SD		.92	1.03	.81	1.01	.84	.83
						N あてはまる=322 あてはまらない=34	
⑧ 就学前							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	>>	4.8	4.4	3.0	2.9	2.4	< 2.7
SD		.92	.91	.99	.94	1.09	1.18
IWM							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	>	3.7	3.4	3.6	3.7	2.9	3.1
SD		.93	.92	.81	.89	.84	.80
						N あてはまる=279 あてはまらない=76	
⑨ 就学前							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	<<	4.6	4.8	3.0	3.0	2.6	>> 2.2
SD		.93	.92	.96	1.00	1.09	1.11
IWM							
		安定		アンビバレント		回避	
		あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	<	3.5	3.8	3.7	>> 3.5	3.1	>> 2.8
SD		.94	.91	.82	.82	.83	.82
						N あてはまる=223 あてはまらない=134	

⑩

就学前

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.7	4.9	3.0	3.0	2.6 >	2.2
SD	.96	.86	.98	.96	1.14	.98

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.6	3.7	3.7	3.6	3.0 >	2.8
SD	.91	.98	.81	.87	.84	.83

N あてはまる=260  
あてはまらない=94

⑪

就学前

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6 <	4.8	2.9	3.0	2.7 >	2.4
SD	.97	.91	.93	1.00	1.21	1.06

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.7 >	3.6	3.6	3.6	3.1 >>	2.9
SD	1.02	.88	.82	.83	.90	.79

N あてはまる=115  
あてはまらない=242

⑫

就学前

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6 <	4.8	3.0	3.0	2.6 >>	2.3
SD	.97	.87	.94	1.01	1.16	1.03

IWM

	安定		アンビバレント		回避	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	3.6	3.6	3.7	3.6	3.0 >	2.8
SD	.95	.92	.84	.81	.84	.81

N あてはまる=193  
あてはまらない=164



表 4；女子大生の介護養護性の違いにおける 2 群の親の養育行動・態度認知（PBI）、青年期前期の愛着（IPA）の平均値と標準偏差および T 検定結果 >:p<.05 >>:p<.001

①

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6 >>	4.0	2.6 <<	2.9	4.2	4.0
SD	.67	.81	.79	1.05	.84	1.00

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.7 >>	3.9	3.7 >>	2.9	3.2 <<	3.8
SD	.77	1.07	.90	1.05	.95	1.15

N あてはまる=262  
あてはまらない=96

②

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.7 >>	4.1	2.6	2.7	4.3 >	4.0
SD	.68	.73	.85	.93	.83	.96

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.8 >>	4.0	3.7 >>	3.1	3.2 <<	3.7
SD	.75	.99	.91	1.00	.98	1.06

N あてはまる=212  
あてはまらない=145

③

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.5	4.4	2.7	2.6	4.2	4.2
SD	.82	.73	.93	.86	.88	.89

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6	4.4	3.7 >	3.4	3.3	3.4
SD	.09	.06	.10	.06	.11	.06

あてはまる=103  
あてはまらない=255

④

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.5 >	4.3	2.7	2.6	4.2	4.2
SD	.75	.76	.92	.81	.87	.92

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.5	4.4	3.6	3.4	3.4	3.4
SD	.94	.89	1.02	.94	1.05	1.02

N あてはまる=231  
あてはまらない=127

⑤

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.5 >>	3.8	2.6	3.0	4.2	4.0
SD	.71	.90	.85	1.12	.87	1.01

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6 >>	3.6	3.6 >>	2.7	3.3	<< 3.9
SD	.85	1.10	.91	.97	1.00	1.22

⑥

N あてはまる=319  
あてはまらない=37

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.7 >>	4.4	2.6	2.7	4.2	4.2
SD	.62	.77	.83	.89	.84	.90

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.9 >>	4.4	3.9 >>	3.4	3.2	3.4
SD	.64	.96	.76	1.03	.97	1.04

⑦

N あてはまる=82  
あてはまらない=275

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.5 >>	3.9	2.6	2.7	4.2	4.0
SD	.73	.79	.83	1.22	.86	1.17

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6 >>	3.7	3.6 >>	3.0	3.3	< 3.8
SD	.85	1.17	.96	1.19	1.02	1.05

⑧

N あてはまる=322  
あてはまらない=34

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.5 >>	4.1	2.6	< 2.9	4.2	4.1
SD	.73	.77	.84	1.01	.87	.97

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.6 >>	4.0	3.6 >>	3.2	3.3	<< 3.7
SD	.87	.99	.99	.95	1.00	1.10

⑨

N あてはまる=279  
あてはまらない=76

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.3	<< 4.6	2.7	2.6	4.2	4.2
SD	.76	.71	.84	.94	.87	.93

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.4	<< 4.7	3.4	<< 3.7	3.6 >>	3.1
SD	.92	.89	.98	.99	1.01	1.00

N あてはまる=223  
あてはまらない=134

⑩

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.4	<< 4.7	2.7	2.6	4.2	4.3
SD	.79	.62	.91	.81	.90	.85

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.4	<< 4.7	3.5	3.6	3.5	3.1
SD	.95	.77	1.03	.88	1.05	.92

N あてはまる=260  
あてはまらない=94

⑪

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.3	<< 4.5	2.7	2.6	4.2	4.2
SD	.82	.71	.91	.86	.95	.86

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.3	<< 4.6	3.4	< 3.6	3.6 >	3.3
SD	1.00	.86	1.04	.96	1.08	1.00

N あてはまる=115  
あてはまらない=242

⑫

PBI						
	情愛		依存期待		決定尊重	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.3	<< 4.6	2.7	2.6	4.2	4.1
SD	.76	.73	.88	.88	.92	.86

IPA						
	信頼		コミュニケーション		疎外	
	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
平均	4.3	<< 4.6	3.4	< 3.6	3.6 >>	3.2
SD	.96	.85	1.00	.97	1.06	.96

N あてはまる=193  
あてはまらない=164

**Abstract**

The present study was undertaken to analyze the relationship between the past parent-child relationship (attachment to parents and parental attitudes and behaviors related to care of children) and the awareness during adolescence about nurturance (consciousness of one's own role in protecting children) and about assistance (consciousness of one's role as an assistance provider). The subjects of this study were 378 female university students. They received a questionnaire survey, involving 182 questions pertaining to interest and care in/for babies and children, care for aging parents, preschool mother-child attachment, attachment to parents during high school age (IPA scale), recognition of parent's nursing attitudes and behaviors (PBI scale), current attachment to parents, and so on.

Analysis of the association between nurturance and parent-child relationship suggested that the presence/absence of secured mother-child relationship during the preschool age and the presence/absence of current attachment to parents are associated with the awareness of nurturance and assistance during adolescence. An association was also noted between the memory of parents' affectionate nursing attitudes/behaviors and the desire to protect or assist children and parents during early youth. Regarding the relationship between the awareness of assistance providers and the mother-child relationship, it was suggested that the desire to provide assistance to parents is associated with the level of stability in the preschool parent-child relationship, attachment to parents during early adolescence (trust and communication) and current attachment to parents.

**Key words:** nurturance, parent-child relationship, questionnaire survey